

外国人相談会 Fraternite 活動報告

令和5年11月25・26日



ふあすでは、内閣府「休眠預金活動事業」による中部コンソーシアム助成による外国人向けの相談会を開催しています。(幹事団体 NPO 法人愛伝舎) 令和4年から6年度の3年間で2ヶ月に一回、最終土曜・日曜で、ふあす施設を会場として、若者のためのワークショップと、児童生徒のための発達相談会を行っています。



ふあすがある三重県鈴鹿市は、日系南米人が多く、就学就労も共生社会を目指している集住都市です。外国人支援に永く携わる NPO 法人と、共同してコンソーシアムを組み、ふあすでは2つのポイントを置いて、相談活動をしています。以下にその様子を報告します。

1. 発達に気掛かりがある児童の相談

ふあすが発達相談事業として展開している発達支援については、一定割合で外国につながる児童生徒も存在すると想定されますが、言葉や文化の壁によって、発見が遅れ、適切な支援が受けられないままドロップアウトすることが懸念されます。ふあす内には、児童発達支援施設・放課後等デイサービスの福祉事業所を構えており、医療・福祉・教育の分野との連携をとりながら、療育を行なっ



ているので、通訳を介して保護者の相談に応じて、必要があれば、療育が受けられるようにしています。もちろん日本の子どもと同じ手続きが踏むため、医師の意見書の基となる発達検査・知能検査などを準備し、行政窓口や学校支援会議などに参加していきます。

子どもを思う親の気持ちに、国の隔たりはありません。言葉が違っても、熱心に相談に訪れ、福祉通所につながる家庭も増えています。ふあすの、ラーニングルームふあせつとでは、読み書きや社会性トレーニングをプログラムとして準備し、外国につながる子どもたちにも提供しています。

2. 若者のための居場所作り

東邦大学医学部大森病院所属の福井英里子医師は、群馬県において、外国につながる高校生たちが日本の高校生と比べて、抑うつ傾向が強いという論文を発表しました。福井医師と共同し、ふあすでは、それを予防するための、ワークショップを計画し、研究を始めました。東邦大学とふあすの共同研究として、取り組んでいます。

5 回程度のワークショップをプログラム化しています。相互の文化を取り入れた活動とその振り返りの中から、自身について見直し、意見交換をする内容となっています。9月には中秋の名月にちなんだ生花をモチーフに、創造性を引き出し、語らう場を作りました。単な

る制作や遊びに留まらず、人権的なファシリテーションや認知行動療法的アプローチを、ふあすの専門相談員が行なっている点が特徴です。臨床発達心理士が関わって、ワークショップを企画運営しています。



本相談会は、場合によっては WEB 会議システムを使用して行うこともできます。

皆様の地域で相談に繋がりたい方があれば、右のフォームよりご連絡ください。次回は1月27・28日（土・日）です。

通訳や先生方の参観も歓迎です。



このような取り組みが広がって、外国人家庭の発達支援が促進されることを期待しています。相談会を通して相談内容をまとめた研究報告を、令和6年3月開催発達心理学会第35回大会で行う予定です。

以上